

Trial & Error

No.281

July-August 2010



■菜園でできた野菜を収穫する。(ジョハネスバーグ市近郊のソウェト地区)

特集

「あるもの」を活かす暮らし
南アフリカの都市部で菜園をつくる

「あるもの」を活かす暮らし

南アフリカの都市部で菜園をつくる

JVC の活動の柱のひとつである地域開発において、これまではその活動のほとんどが農村での暮らしを良くすることに焦点をあててきた。一方で、石油をはじめとする天然資源は枯渇し始め、「新自由主義経済」「グローバル化」といった言葉に代表されるような市場経済を中心とした消費社会が限界を迎えつつある現在、「持続可能な地域づくり」「農村における農的な暮らし」が注目されてきている。しかし JVC 南アフリカでは、このような時代にあえて都市での活動を開始した。菜園研修を通して行なうその試みを紹介する。(編集部)

「都市」にある希望

南アフリカ現地代表兼東京事業担当 渡辺 直子



大学卒業後、海外でのボランティア活動を経て、イギリスの環境保護 NGO スタッフとなる。その後、筑波大学で修士号を取得。〇五年から JVC に南アフリカ事業担当として参加。一〇年四月より現職。

■都市での活動を再開

JVC は九二年より南アフリカ共和国（以下南ア）での活動を開始、約半世紀続いたアパルトヘイト後の南ア社会の再建に関わり、二〇〇〇年代に入っ

た。農村での地域開発にその拠点を移していった。その背景としては、国の再建政策から据え置かれた農村という課題があり、出稼ぎ社会である南アにおいて農村での暮らしを安定させていくことは欠かせないということがあった。〇一年からは東ケープ州カラ地区での環境保全型農業の普及事業（六ページ参照）、〇五年度からはリンボポ州の農村で現地 NGO と協働で HIV/AIDS 陽性者支援事業を実施している。これまでの活動で一貫しているのは、すでにその現場に「あるもの」を活かして生活を改善していくことだ。そして、活動そのものが、

人びとが自分たちの暮らす環境や文化・伝統の価値に気付き、自らの生き方に誇りを取り戻していく過程であった、ということである。これらの活動はこの十年を経て、それぞれに成果をあげてきている。

しかし一方で、農村に集中して関わるなかで、良くも悪くも農村にとつての「都市」の存在の大きさが見えてきた。環境保全型農業による生活改善という結果が出るまでに時間がかかる活動に参加できる人の多くは、年金や家族の都市への出稼ぎによって何らかの形で現金収入がある人だった。HIV/AIDS の活動において在宅介護ボランティアの活動に集中できる人においても同様である。逆に、活動に関わる人たちの家族が都市でエイズで亡くなったり、事件に巻き込まれる・職を失うこともあり、病気や大怪我をして出稼ぎ先から村に戻ってくるケースにも多く出くわした。

アパルトヘイト下の南アでは、黒人たちは様々な差別や移動の制限を受けるとともに、農業を含むあらゆる生産行為や商売を禁じられていた。加えて税金が課せられることで、農村に住む人が農民として生きるのはなく（＝農業収入を得られない）、出稼ぎをして現金収入を得る稼がざるを得ない状況が作り出された。これが今も社会構造として残っており、農村地域だけでは暮らしが成り立たないようになっている。また、このような社会・歴史的背景を受け、南アでは現在人口の六割が都市で暮らしている。国民の七割が農村に暮らしつつそのほとんどが農民である一般的なアジアの国々と比べ、その社会構造はまったく異なる。

これら状況を受けて、南アの社会の課題をとらえていくに際して農村の側だけに関わることに限界があるのではという認識の下、再び都市にも活動拠点を置くことにした。

■中学校や家庭で菜園を

活動はハウテン州にある南ア最大の都市ジョハネスバークの南西部にあるソウェト地区と言われる旧黒人居住地（タウンシップ）で行なっている。〇九年度は調査を兼ねた小規模な活動を実施し、今年度より二年間の事業として活動を開始している。内容は、地域内の中学校の敷地を借りて地域住民を対象に化学肥料や農薬を使わない持続的農業の研修を実施している。過去の活動と同様「あるもの」を活かした内容で、いずれ JVC がいなくなった後にも参加者たちだけで実践を継続していける方法を取り入れている。活動開始から一年が経ち、少しずつ成果が見え始めている。学校菜園では、自家消費分にプラスし

都市貧困地域における菜園研修

ジョハネスバーグ市近郊のソウェト地区（次ページ参照）において、中学校の敷地内につくった菜園を利用して、地域住民を対象に持続的農業を用いた菜園づくりの研修を実施している。

■活動が目指すもの

研修を通じて、参加者が経済面・環境面で持続的な方法で菜園づくりが実施できるようになること。これによって、

- ・継続的に食料を確保できるようになる
- ・家計の中での（野菜を購入するための）支出を減らすことができる
- ・外部環境に翻弄される度合いが低くなる

というように、自ら生活状況を改善させていけるようになることを目指す。そして、参加者が自分たちが今持っているもので生活を組み立てていけることを実感し、それによって自信をもち、生きる力を得る過程となることも期待している。



■対象者、規模

ソウェト・オーランドイースト地区住民（なんらかの形で自ら菜園づくりを始めている人で技術的な支援などが必要な人に限る。無職もしくは安定した職がない人がほとんど）

- ① 08 年度菜園研修参加者 約 15 名
- ② オーランドイースト内の HIV/ エイズ関連 CBO ボランティアおよび無職の女性グループなど約 50 名
※その他、活動に関心を持って研修を依頼してくる人が積極的に伝えていく。
- ③ ジフネレニ中学校生徒約 700 名のうち、家族以外からのケアが必要な生徒約 60 名（野菜寄付の対象として）

■菜園研修の内容

お金をかけず、環境に負担をかけず、手元にあるものを活かして持続的方法による菜園づくりの手法として、

- ・枯れ草で土を覆うマルチ⇒土中の水分蒸発や表土流出を防ぐ。
- ・雨水の有効活用（マルチ、溝をほる、雨水を溜める）
- ・採種、苗作り⇒翌年から種や苗を買わなくていい⇒お金がかからない⇒経済的に持続的
- ・混作（多品種の野菜を同時に植える）⇒虫除けになる、害虫被害が起きたときの被害が少ない、いろいろ食べれて栄養面でも良い。
- ・コンポスト（有機堆肥）づくり（牛糞などの利用。手に入りにくいときには、ポロ布や紙を使って作る）
- ・防虫方法（においの強い雑草を水につけて発酵させる、匂いのものを植える、混作など）

などの方法を学ぶ。

て野菜が採れるようになり、その販売によって月五千円程度の収入が得られるようになった。また、不定期ではあるが学校の給食用に野菜を寄付している。家の敷地内に少しでも土地のある人は、全員が家庭菜園を始めた。参加者はほとんどが無職、年金暮らしの人、あるいは不定期で仕事をしている人である。南アの黒人社会においては、教会や日本という頼母子講（たのもしこう）のような「ソサイアティ」が人びとが経済的にも人間関係としても支え合う基盤として大きな意味を

■なぜ都市において持続的農業なのか

持つが、研修の参加者たちはいずれも寄付ができない、出資するお金がないということでこうした社会関係からも疎外されていた。しかし支出が減り、その分の現金が手元に残ることで教会に行き始めた人もいた。

いるわけではない。物価高騰にもなると貧困層の置かれる状況はより困難になる一方で、目の前に絶望的な格差が広がるなか将来への希望を描きにくい社会になっている。ドラッグ、アルコール、犯罪、HIV/エイズ、失業、食料不足、孤児の増加など直面する社会的課題を多く抱えたままである。

年（この）の世界的な不況の時の出来事だった。この時は南アでも食料の値段は高くなり、貧しい人ほど食料が買えなくなってしまうていた。その一方、かつての活動地であるカラ地区で自給自足に近い生活をしている農民たちは、さほどその影響を受けずに済んでいたのである。確かに現金収入という意味では不足もあるかもしれないが、自分たちが持っているものを活かして生活を組み立てていけることは、外部環境に翻弄されにくいという意味でときに非常に強い力を持

※注① 頼母子講：もともとは鎌倉時代に庶民の相互扶助として始まったと言われている会・組織。メンバーが毎月お金を出し合い、積み立てたお金で冠婚葬祭をとりおこなったり、メンバーに順番で配分したりする。現在では、相互扶助の目的よりも、職場や友人・地縁的な付き合いの延長としての色合いが強いようだ。

ソウェト地区について

南アフリカ最大の都市ジョハネスバーグ市南西部にあるソウェト地区は、山手線の内側ほどの面積の急黒人居住地区で、ジョハネスバーグに出稼ぎに来た黒人の居住地として形成された。ここに暮らす人は300万人とも500万人とも言われているが、いまだに人の流入は続いている。トタン板の小屋が密集しているようなスラムもあれば立派な家が立ち並ぶ地域もあり、ソウェト内だけを見ても貧富の格差は激しく、人種・文化・生活レベルなどさまざまな点で多様性に富んでいる。76年の『ソウェト蜂起』の舞台でもあるこの地区では今でも住民レベルで様々な形態の活動が行なわれている。



■小屋が密集するスラム。



■アリスさん(左上)のお宅の家庭菜園。塀や建物の壁ぎわに沿ってたくさんの野菜が植えられている。

つ。このことから、都市においても、たとえ狭い土地であつても農業を通じて自給できるようになることが重要なのではないかと考えた。

また、そもそもの生活状況が苦しいなかで、まずは「食べられるようになること」自体が重要だったことも農業を選択した理由のひとつである。

■生活の一部を「市場経済」から切り離す

南アは二〇〇〇年代に入ってから、〇九年に世界的な不況の影響を受けてマイナス成長に転じるまで、豊かな鉱物資源を背景に毎年約五%の経済成長を遂げており、〇七年にはGDPが世界二十七位の経済力を持つまでになった。にもかかわらず、人間開発指数は百二十五位(百七十七カ国中、〇七年)であり、皮肉にもアパルトヘイトが終った直後からこの数値は右肩下がり傾向にある。アパルトヘイトの後遺症をひきずったままの南アは、この極端に引き裂かれた格差社会を指して「世界の縮図」とも言われているが、NGOとして南アに関わるということは、この巨大な経済力と劣悪な社会環境を同時にくりだした社会経済システムをどう捉え

直していくかということが常に問われていると感じる。

都市での活動を検討し始めた昨年、JVC内部で共有したところ「都市に希望はない」という反対の意を含んだ声もあがった。確かにそういう面もあると思う。一方で、その発言者も含めJVCスタッフは東京・海外事務所ともにほぼ全員が都市部に住んで活動している。

市場経済を中心とした消費社会に限界が見えつつある今の時代においては、社会経済活動あるいはライフスタイルそのものを持続可能な方向へとシフトさせていくことが求められている。個人レベルで言えば、なるべく環境に負荷をかけず、他所から搾取をせず、手元にある自然を永続的に利用していけるような暮らしのあり方である。これを今すぐに一〇〇%実行するのは難しいかもしれないが、規模は小さくとも自らの生活の中に「市場経済・消費社会」から切り離された部分をつくり、それを増やしていくことはできる。この点においても、都市であっても「あるもの」を活かした持続的農業で生活を支えていくとする今回の活動は無意味ではないのだと思う。

■「安心して暮らせること」を優先できる社会に

ただし、こうしたライフスタイルそのものを持続可能なものとさせるには、それを支える仕組みが必要だ。カラ地区で活動していた篤農家のンディビさんは以前こう話していた。

「かつては金鉱山で働いていてお金はあったけど、危険な労働環境で働き、一年に一度家族のもとに帰れるかどうか、そしていつ解雇されるかわからない不安な生活を送っていた。でも今はお金はないけれど、家族と一緒に安全な食べ物をつくって安心して暮らせる。だから今のほうが幸せだ」

ンディビさんはJVCとの活動を通じて、自分の周りにある自然環境の価値に気づくようになり、それを持続的な方法で利用しながら、貧しくとも誇りを持って生きていく。都市にせよ農村にせよ、彼が思うような暮らしを多くの人がしていけるようになるためには、国や地域における福祉、医療、教育、環境、農業、経済政策などさまざまな分野・レベルでの対策が必要となるだろう。JVCの現地での活動を通して実感することは、「一人ひとりの人間がいっき

と暮らすにはどのような社会が必要なのか」ということを出発点として具体的な政策の方向性を見出していくことの重要性だ。残念ながら、現在の世の中はそういう順番にはなっていないが、この流れをつくっていくのが我々NGOの役割のひとつなのだと思う。JVCの活動のビジョンには、単なる「支援」だけではなく、ともに考える仲間を増やしていくこと、そうした人たちとオルタナティブな社会をつくっていくことが明記されている。これは、活動を通じて現地の人たちとコミュニケーションを取りながらこうした価値感を共有し、つなぎ、広げていくことに他ならない。

◎

極端に言ってしまうと、「都市」に希望はないのかもしれない。しかし、「都市に暮らす人びと」に希望はある。いきいきと菜園の世話をする南アの人びと、あるいは普段から東京事務所でサポートしてくださるボランティアの方々を見ているとそう思うのだが、どうだろうか。

※注② 人間開発指数：GDPは単にその国の所得の水準を示すものであり、その所得の用途はわからない。人間開発指数は、長寿・知識・人間らしい生活水準の3つの分野について測った数値で表され、その国の人々の生活の質や発展度合いを示す指標のこと。

菜園研修の関係者にお話を聞きました。

菜園研修の参加者

セリーナ・ランツアーネさん



研修で学んだことはすでに役に立っています。有機肥料を使うことで実際に土の状態がよくなつて質のいい野菜が取れるようになりました。

また、混作をすることでいろんな野菜を食べることが出来ます。研修を始める前は、主食のパップとポトフライを一日二回食べられるかどうかという食生活でしたが、今は子どもや孫に新鮮な野菜を使った食事を出してあげられるのが嬉しいです。種の保存や苗づくりも学びましたが、これは他の人たちと交換できるのが楽しいです。

今は私の年金で子どもや孫も暮らしているのですが家庭菜園をして支出が減ることは重要です。これで得られたお金でサワークリームを作って近所の人に販売してわずかですが現金収入も得られるようになりました。こうした経験を共有したくて、近所の同年代の女性たちに家庭菜園づくりを教えています。

これまで日本という国はお金持ちで自分たちとまったく違う人たちが住んでいる遠い国というイメージでしたが、こうして私たちと一緒に活動をして、家に泊まりに来たり、いろんな話をしたりして、自分たちと変わらない人が暮らしているんだと、活動を通じて距離が近くなったような気がしています。

菜園研修に敷地を提供してくれている ジフネレニ中学校の校長先生

マイク・マンゲーナ校長



学校は地域の拠点です。将来的にですが、職がない方々へのコンピュータ教室を開催したり情報センターを設けたりするなど、地域をサポートする活動をしたいと考えています。学校の敷地の一部を地域の方に提供して菜園づくりに使ってもらう今回の活動への協力は、学校のこうしたビジョンの現れのひとつです。

住民の方々がJVCと活動を始めて、畑がとても美しくなったのには感動しました。これを見てもらうために教育省の人に学校に来てもらったこともあります。当校には、家が貧しい、親がいない、あるいは病気であるなど家庭の事情で学校に来られなくなる子が少なからずいます。そんな子どもたちに対して、現在は教員たちが自費で給食を提供しています。今回の活動が始まってから、研修の参加者が（不定期ですが）菜園でできた野菜をこの給食のために寄付してくれました。とても助かっています。

今後、学校側としても本場にケアの必要な子どもをもれなくフォローできる仕組みを整え、給食などを通じて子どもたちをサポートしていけるようになりたいです。ゆくゆくは菜園でできた野菜を販売して、学校の活動を発展していければと思っています。

アフリカボランティアチームも「都市で菜園」に挑戦中です。

ボランティアチームのなかに農業や食に関心がある人がいて、JVCが南アフリカで菜園づくりを支援していることもあり「自分たちでもやってみよう」ということになって、今年の春から東京の東村山市内の農園内に小さな区画を借りて菜園を始めました。

農業はみんな初体験で、畝作り、種まき、ネットかけなどと四苦八苦していますが、週末ごとにワイワイ楽しく取り組んでいます。芽が出てからは野菜君たちの成長に一喜一憂し、初収穫のかぶの味噌汁やレタスサラダの美味しさはひとしおでした。

土とたわむれるだけで癒されますが、小さな種から芽が出てぐんぐん育つさまを見ると、人間の力など及ばない自然の力の偉大さを感じます。普段の生活ではなかなか味わえない感動がありますね。

（アフリカボランティアチーム
山下直子）



■菜園は11mx2.6mの広さ。これでも作業はなかなか大変です。

菜園の様子は
ブログで
更新中！

身のまわりの自然を活かし、仲間と助け合う——それが、人生の支えになる。

自然農業専門家 ティム・ウィーグリー

2001年から8年間にわたってJVCが環境保全型農業の普及活動を実施していた、南アフリカ東ケープ州カラ地区。ここでの活動に自然農業専門家として関わったティム・ウィーグリーさんに、カラ地区での活動から得られたことを振り返ってもらった。(編集部)



■畑の観察の方法を習う篤農家たち。右端がティムさん。

環境保全型農業の普及活動

南アフリカ東ケープ州カラ地区で01～08年度にかけて実施していた。村人の持続的な自給用食料の生産と自足を目指し、環境に配慮し、「今ある」資源を活用する(お金のかからない)農法の研修を実施した。

07年度からは、篤農家を対象にトレーナー育成のためのトレーニング(TOT)を実施し、カラの農民だけで実践、活動を広げていけるようになったため、08年9月で活動を終了。

JVCは現在でも、南アの農業政策のウォッチや活動後の状況のフォローとして、年に1～2回現地を訪問している。

私はかつて、ある国際NGOで働いていましたが、そこでの活動に次第にがっかりするようになり、村人が自分のもつ能力や環境を活かして人として成長していく過程をサポートするのではなく、彼らに依存体質を植え付け、外部からの援助に頼るようにならせたことがわかったからです。人びとが自分たちの周りにある自然を利用しながら生きていくのをやめたとき、自然環境が軽視されることにも不安を覚えました。

その後私はそのNGOを辞め、自分の農園で研修を実施することにしました。しかし、自分の村と離れた所で村人に研修を行なうよりも、村人自身が暮らしている場所でこそ、そこにある環境を活かして学べるのではないかと考えるようになりました。

そして九八年にJVCと出会い、〇一年からともにカラ地区での活動を開始しました。私たちは彼らの暮らす村々を訪問して研修を行なうことになりました。JVCと私は共通の考え方を持っていました。私たちは人びとが「貧しく、無力」だから、彼らの生活を改善するため「何かをあげよう」という態度で接するのではなく、彼らがすでに持っているものを活かして自分たちの生活をより良くしていくことができるんだということを通して伝えてきました。しかし、活動開始当初は身近な自然資源や人材といったものは軽視されがちでした。例えば昔の人たちは、家畜の糞を使って肥沃な土をつくるなど、自然の中から必要なものを手に入れ、必要な食べ物を作ることができていたのですが、現代の人びとは化学肥料や農薬を使わないと農作物を育てられないと教えられてきたためです。

この認識を変えたことが、おそらくJVCがカラ地区で行なった環境保全型農業普及プロジェクトがもたらした最も重要な変化だと思います。実際、そこにある環境を活かしていくことの有効性を農民が再認識する出来事がありました。〇六年頃から、私たちが活動する村のいくつかで政府による「貧農支援」と銘打たれた食糧増産援助プログラムが導入されました。これは種・化学肥料・農薬の提供とトラクター貸し出しをセットにして、南アの黒人たちが主食としているメイズ(トウモロコシ)の増産を図るものです。初年度はかかる費用はすべて無料ですが、翌年度から農民の負担が段階的に増えていき、最終年に農民が全額負担することになっていました。しかし蓋を開けてみれば、その土地に合わないハイブリッド種^{※注①}を使つての栽培は負担額に見合う収量を得られず、結局農民は借金を抱えることになりました。同じ頃実施した収量調査によると、農薬も化学肥料もトラクターも使わず、牛糞のみを使つて牛で耕した畑ではヘクタールあたり四・九トンの収穫があったのに対し、食糧増産援助が導入された畑では一トンに満たない畑もあれば、多くても四・二トンでした。しかも前者は経費がゼロ、後者は石油価格の高騰を受け、〇七年度には一〇・五万円相当の経費がかかっていたのです。どちらがより持続的で効果的に人びとの生活を改善していけるかは、誰の目にも明らかでした。

※注① ハイブリッド種：交配種、一代雑種、F1種ともいい、均一で早い成長速度、多い収穫量、病気に対する強い耐性などの特徴を持つ。普通に流通している野菜の多くはこれに該当する。しかし、成長しても正常な種子がとれないために、毎年新しく種子を購入する必要がある。

「守るも攻めるも農業なんだな」と、 山下惣一さんがつぶやいた

農業ジャーナリスト 大野 和興



■石だらけの斜面を拓いたオリーブ園。白く露出している部分はすべて石だ。



■日本やヨーロッパにフェアトレードで輸出されるオリーブオイルの瓶詰め工場。

今年の二月、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地域に出かけた。途中、JVCパレスチナの福田さんらとも合流、西岸地域の村を訪ねる旅を重ねた。空爆するイスラエルの爆撃機、火を吹く戦車、瓦礫の山、死者をなげき悼むパレスチナの人びと、テレビの映像を通してなじみになってしまったパレスチナの現実の、その向こうで人びとはどんな日常を営んでいるのか、村を歩き、農業の現場で農民と触れあうなかで、そのことを知りたいと思う、日本の百姓や農業に近くで働いている友人らと誘い合わせての旅であった。

「村を歩きたい」という私たちの願いを受け入れてくれたのは、パレスチナ自治区の農村で活動するふたつのNGO、パレスチナ農業復興委員会（以下PARC）とパレスチナ農業開発委員会（以下UAWC）。イスラエルの占領により深刻な影響を受けている農村の復興に携わり、オリーブオイルのフェアトレードも行なっている。

PARCの事務局長を務める

■農民とは生きることが戦い

「パレスチナの農業を語ることとは、そのまま政治を語ることなのです」

カハリ・シアさんの話は、そんな言葉で始まった。イスラエルの占領は農地と水の収奪から始まる。村に根を張り、農業と続け、農民として生きていくこと自体が、抵抗であり闘いなのだと言った。

乾燥した大地。石だらけの山の斜面は一面オリーブが植えられている。土の上に石があるのではなく、石の隙間に土がある。これらの土地のかなりがイスラエルからの入植者によって侵食され、農業だけでなく生活にも欠かせない水源の八五％はイスラエルの管理下にある。周りを入植者で囲まれている西岸地区北部の村を訪ねた。そのひとつスリフ村は、五百家族で人口三千人ほどの農業の村だ。村の面積は四百ヘクタール、うち村人が耕す農地の面積は百五十ヘクタールほどで、そのうち百四十ヘクタールがオリーブ園だということだった。

■もうひとつの最前線

入植地はたいがい山の上に作られる。入植地から一気に駆け下りてくると、真っ先にたどりつくお宅を訪ねた。六人家族で、うち四人が小さな子どもたちだ。この家はこれまで何度も入植者の集団に襲われている。

十代の子どもから大人まで集団でやってきて石を投げ、火をつけ、斧を振り回して窓を壊し、催涙弾を投げ込み、オリーブの木を切り倒し、引き抜く。襲撃の間じゅう、幼い子どもたちは震えながら物陰に身を潜めて過ごす。

「守るも攻めるも農業なんだな」と同行していた農民作家の山下惣一さんがつぶやいた。佐賀県唐津市でミカン農業を営みながら小説やエッセイを書く有名な人だ。筋骨たくましい、ごつい風貌に似合わぬ鋭い感性の持ち主で、物事の本質を短い言葉ですばりと言い当てる。村に入っただけの第一声が山下さんのこの言葉だった。

こうして入植地が次第に拡大していく。爆撃機や戦車による攻撃ではない、もうひとつの攻撃がここにはある。農地を奪い、水を押さえ、人びとが農業をあきらめ、村で暮らせないようにする。パレスチナに対するイスラエルの占領の本質がここにある。パレスチナでは、山下惣一さんが言うように、農業と農村がもうひとつに最前線だということがよくわかった。

第十一回JVC会員総会 報告

会報誌レイアウト／総務担当 細野 純也

六月十二日、第十一回JVC会員総会を東京・池袋で開催しました。正会員六十四名と賛助会員五名の出席がありました。会員の皆さんからの強力なバックアップを感じる活発な質疑応答も交わされました。

■あいさつをする谷山。



最初に、代表の谷山博史からあいさつがありました。JVCには設立当初から、かわいそうな人を助けるだけではなくそれを自分の問題としてとらえる人が多いことをあげました。現在における沖縄の基地問題を例にあげ、これがひいてはアフガニスタンやイラクでの戦争に結びつくとして日本と海外の問題の関連を再確認しました。そして、組織体制の改善を進めると同時に、意思を持った個人の共同体というNGO本来のスタンスも忘れずにいたい、そのためにこれからも「NGOのあるべき姿」とともに議論して探していきたい、という表明がありました。

■議案①・

〇九年度活動報告・決算報告

まず事務局を代表して事務局長の清水俊弘が、各国における問題とJVCの各活動との関連性を明示して、これにこたえるための組織の体制改善について説明しまし

た。続いて、事務局より地域開発、人道支援、国内活動についてそれぞれ報告を行いました。経理担当から決算報告を、続いて監事の黒田かをりから〇九年度決算は適正に実施されているとの報告がありました。その後、アフガニスタン事務所で起きた盗難事件と対応について理事の熊岡より説明を行ないました。質疑応答の後、報告・決算は承認されました。

■議案②・

一〇年度活動計画・予算案

はじめに代表の谷山から、四月に実施した代表者会議で確定した中期方針の紹介と、一〇年度における組織全体に関する課題認識について説明しました。続いて、事務局より本年の計画を発表、予算案を経理担当が説明しました。質疑応答を経て、計画・予算は承認されました。

■議案③・役員改選

大野和興理事、齊藤誠理事、樋

10年度計画・予算案に関する主な質問事項

- 質問①・先日イスラエルによるガザ支援船の拿捕に憤りを感じる。これに対して組織全体で集中して対応しないのか？
- ▼思いは同じだが、積極的な抗議活動をするか現地で活動できなくなる。今回は日本政府への要請にとどめることを選択した。
- 質問②・組織・予算規模が小さい。真剣に拡大を考えるべきでは。
- ▼規模拡大のために手段を選ばない、という選択肢はとらない。ODAにもなるべく依存しない。しかし、会員を含めた支援者拡大は大きな課題だ。
- 質問③・一昨年のミャンマーのサイクロン被害や四川の地震被害を見ると、支援が本当に必要なところに届くようにすべきと思う。
- ▼なんにでも関わってしまうと逆に力が分散されてしまう。一定の基準をもとに意思決定している。
- 質問④・日本は「豊かな国」ではなくなりつつあり、支援も集まりにくくなるのが想定される。今後の方向性として、①他の「豊かな国」から資金を獲得する、②国際協力のノウハウを他の「豊かな国」に移転する、③現状維持、のどれを選ぶか。
- ▼①現地レベルで他国の財団から資金調達しているケースもあるが、まだ他国から日本に資金調達に来るのが一般的で想定は困難。②JVCの活動は単にノウハウを移転すればすむものではなく、共に問題の根元を考え、行動したいと思っているので、現在の形の中で努力していきたい。
- 質問⑤・三十周年事業の今後の予定は？
- ▼十一月にイベントを計画している。現地スタッフや関係者の招へいも予定。節目として活用していきたい。
- 質問⑥・ベトナム事業の繰越金の使途は？
- ▼今後の交流などの模案に利用する予定。ただし保持し続けるのは問題なので、今年度末の段階で取り扱いを確定させたい。
- 質問⑦・政策提言活動が政策に反映されるポイントがあるか？以前と比べてNGOの声は聞いてもらえるようになってきているのか？
- ▼政府側体制、国際情勢、国内の経済状況などさまざまな要素があり一概には言えないが、以前より協議の場は増えている。提言が根付くには時間も必要なので、訴え続けていきたい。
- コメント・JVCの規模や収益の拡大をスタッフ任せにせず、会員自らが増やす努力をすべき。遠慮せず会員に呼びかけて、地方とのつながりも意識してほしい。他国での評価に影響を受ける日本人の気質を考えて、海外メディアにアピールしては。

09年度報告・決算に関する主な質問事項

- 質問①・会計費目の確認。タイの在タイビルマ労働者支援、スーダンの技術訓練は決算書のどれに該当するか。
- ▼活動の経緯からそれぞれ「スマトラ津波被害復興支援」「難民帰還輸送手段整備事業支援」に該当する。
- 質問②・インターネットでの有料コンテンツの配信で資金にしている？
- ▼どんなことができるか検討してみたい。
- 質問③・為替差損が七百七十万円とあるが、どんな為替対策を？
- ▼これまではしていない。監事とも相談しており、今後は海外送金時にある程度の為替予約をとるなどの対策を検討する。

※注① 為替予約：将来の海外送金時のレートを一定期間固定にする契約を金融機関と締結すること。円高時にレートで固定しておき、円安にふれた際にも固定時のレートで海外送金することで為替変動の影響による資金の目減りを避けることができる。

口達監事が退任。新たに会員の古沢広祐さん、矢花公平さんが理事に、矢崎芽生さんが監事として新たに承認されました。同時に、代表理事及び副代表の選任を理事間

の互選で行ない、代表理事に谷山を選任（再任）、副代表に磯田厚子を選任（再任）することを承認しました。

新役員からひとこと！

新理事 古沢 広祐 ふるさわ こうゆう (国学院大学 教授)



JVCの活動の様子は、以前から注目しております。とくに地域の草の根の人々の立場に立つて、持続可能な地球社会を目指す実践的な取り組みについて、環境・開発・有機農業などの分野を中心に、微力ながら協力できれば幸いです。

新理事 矢花 公平 やばな こうへい (弁護士)



これまで熱帯林保護と先住民の権利擁護の活動などに関わってきました。JVCは常に私の先達でした。理事として、その輝かしい実績をさらに伸ばし、重要な存在にあり続けることの一助になれば嬉しく思います。

新監事 矢崎 芽生 やざき めい (公認会計士／税理士)



頑張る人を応援したい、そんな気持ちで最近NGOの方々と関わっています。この度監事就任を承認いただきましてとても嬉しく、また身の引きしまる思いです。自分の知識でJVCの活動に貢献できるよう頑張りたいと思います。

午後企画 会員のつどい 特別講演

レシャード・カレッドさん講演

「アフガニスタンと日本、 命を支える現場から」

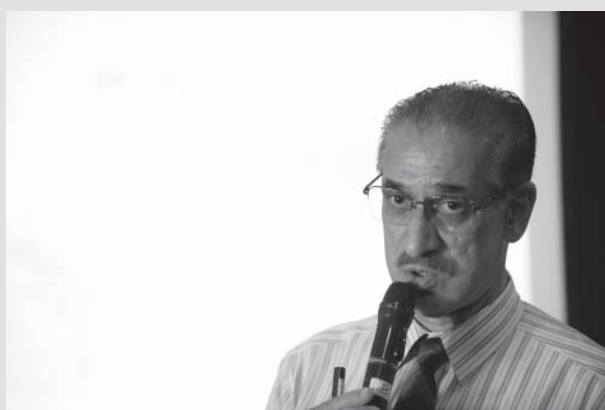
静岡県島田市で開業医をされているレシャード・カレッドさん（六十歳）は、アフガニスタン出身の医師です。〇二年にNGO「カレーズの会」を設立し、戦火に巻き込まれた祖国の復興に尽力されてきました。JVCもこれまでアフガニスタンに関する国会議員との勉強会で一緒にしたり、昨年十二月にはアフガニスタンの活動現場を訪問していただくなど様々な面で協力いただいています。

今回、日本の社会と海外の現場の両方に異なる立場で関わり合っている方としてお招きしました。午後二時から始まった講演は、前半で島田での訪問介護など医療と介護サービスから見えてくる日本の医療や高齢化の実状について、後半ではアフガニスタンの歴史や現状、「カレーズの会」のカンダハール県での医療活動についてのお話、そして社会の一員としての私たちの役割についてご提案いただきました。

「高齢化が『社会の足かせ』だと言っけれど今の日本をつくったのは誰なのか」との自らの問いに答えるように子どもや母親たちがお年寄りの知恵に学ぶ場を地元でつくられたり、「平和は自分たちで考え積極的に動いて護るべし」と語るレシャードさん。常に相手の立場に近寄り、しかし冷めた頭で考え熱い心で行動する彼ならではの提言だとうなずきながら、国内のことにも目を向け、共に生きられる社会を築くためにつながりを強めていく必要を感じました。

(アフガニスタン事業担当補佐

谷山 由子)



家族といっしょに野菜を食べたい！

南アフリカ事務所 プロジェクト・コーディネーター
ドウドウジレ・ンカビンデ



イラスト／かじの 倫子

JVC 南アフリカで働いてかれこれ 11 年。今年で 39 歳、来年はいよいよ 40 歳になります。つまり人生の新たなステージを迎えるのです。

そんなタイミングを前に、今年の目標を「健康的な生活を送ること」にしました（前号参照）。でも、これがなかなか難しいのが現実です。なぜなら、私にはかれこれ二年間一緒に暮らすボーイフレンドがいますが、彼と彼の 14 歳になる息子は野菜が嫌いなのです。多くの南アフリカ人はパップ（白トウモロコシを乾燥させて粉にしたものをお湯で練

る）と言われる主食をサワーミルクあるいは肉と組み合わせて毎日繰り返し食べています。一方、私は日本人と一緒に働くことで、また JVC の家庭菜園研修の活動を通じて栄養価に富んだ健康的な食事というものを学び、これが自分の体にも合うことを実感してきました。

でも、家でいくらがんばってそうした料理を作っても家族は食べてくれないのです。そのうち自分一人のために料理する気も失せて、かといってパップと肉を毎日食べる気にもならず…最近はパンとお茶だけで

すませてしまうこともあります。ちなみに私のボーイフレンドは南アの黒人男性にしてはめずらしく料理が得意で、自分でパップや肉料理を作ってしまうことも逆に災いしています（男性が家事をするのはいいことなんですけど）。

日曜日には奮発してバラエティに富んだ食事を作るのですが、食べるかどうかは結局彼ら次第で、いつも悔しい思いをしています。家族の食事と同じような悩みを抱えている方、どうか私にいいアドバイスをいただませんか？

映画『グリーン・ゾーン』

みるよむきく

監督：ポール・グリーングラス／アメリカ／114 分



ここまで突き抜けていけば、現実のイラクといちいち比較するのも野暮である。ジャーナリストが書いたレポート（これは現実）を参考に練り上げられた

重要人物の名前だ。架空の人物だが、どうしても実在の人物を連想させる。

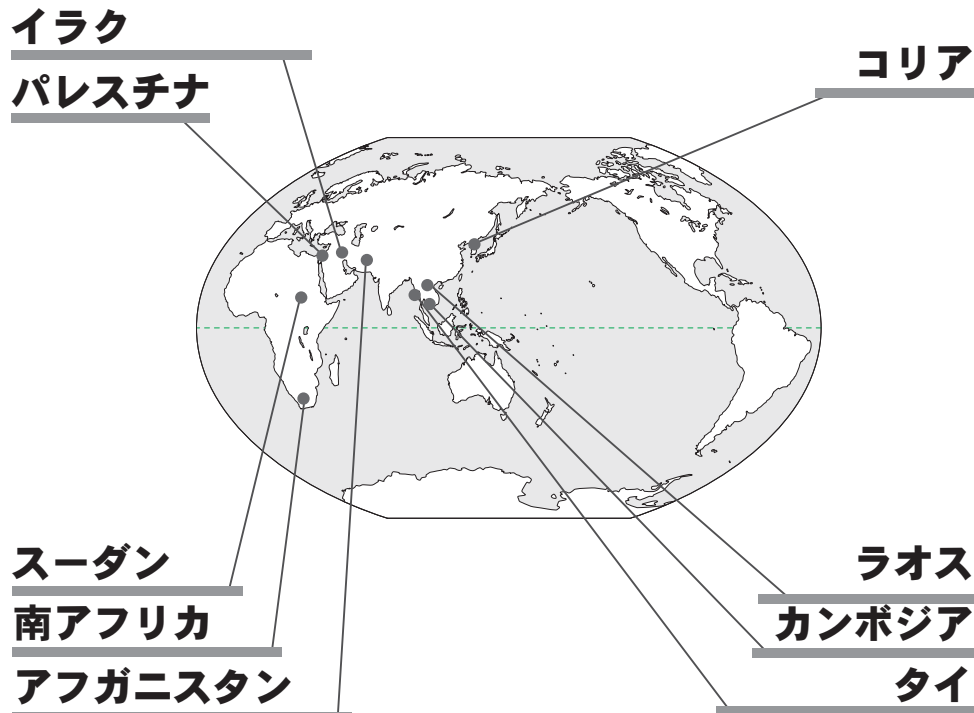
○三年のイラク戦争でサダム政権が倒されて間もない時期に、大量破壊兵器の探索に熱を上げる兵士の主人公は、肝心の大量破壊兵器が見つからないことに疑問を持ち始める…。

アクション映画としては理屈抜きに楽しめる映画だ。たまたまかけるアクションとストーリーの意外性で観客を釘づけにする良くてきた映画でもある。イラクでの撮影でないこと、ご都合主義的な展開、現実にはありえない設定など、細かいあら探しは無意味というものだろう（どうしても気になるのは鍵になる重要人物の名前だ。架空の人物だが、どうしても実在の人物を連想させる）。

ただ、戦争の大義名分であった大量破壊兵器が見つからないという点に光を当てていること、そしてイラクのことはイラク人が決めるべきだというメッセージを伝えていることという意味では、この映画は優れたノンフィクションと言っても良いのかもしれない。惜しいのは、このようなメッセージが正しく伝わるためには観客側にイラク情勢に関する予習が必要だ、ということ。ぜひ前述のレポートを読んでから映画を観てほしい。

（イラク事業担当 原文次郎）

JVC は、現在 9 の国 / 地域で活動しています。



カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07 年からシェムリアップ県東部の 35 村で活動を行なっている。昨年度の活動を振り返りを行った。稲作や野菜栽培などでの成果が報告された一方、乾季の水の問題にも取り組んで欲しいとの声があがった。また、今年度は新たに 20 村程度で活動する計画で、稲作改善ビデオ上映会を実施している。

■環境教育

09 年 4 月からシェムリアップ県東部の 4 つの小学校で実施している。4 月よりさらに 6 つの小学校で環境教育を実施することとなり、これらの学校の教員や郡教育局の職員を対象に活動内容を説明するワークショップを開催。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を 94 年から提供している。JVC が実施した連続講座に参加した学生が週末にセンターで自主的に勉強会を開催するなど、センターが有効に活用されている。

■技術学校

85 年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営している。これまで JVC 技術学校は任意の職業訓練施設であったが、今後は卒業生に短期大学卒業レベルの資格が与えられることとなった。(以上山崎)



■ JVC が環境教育用に配布したポスターを見る子どもたち。

ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業 (サワナケート県)

乾季の水不足に対応するため、3 月前半から引き続き水支援に奔走した。5 月前半まで

に、合計 13 村で 13 基の深井戸建設を行ない、さらに小規模だが浅井戸支援も行なった。また、稲作技術関連では、6 月からの田植えに向けて、4 月に県農林局に村人を招き、実践者の話を中心に SRI を紹介するワークショップを行なうとともに、堆肥／液肥研修も各村で順次開始した。養魚研修についても各村でモデル農家を選定し、研修を始めた。この他、米銀行の設置を 5 村で進めている。米倉が完成し、米銀行を長く成功させている村の村人を招いて話を聞く会を持った。

森林活動では、土地や森林に関する村人の権利意識啓発のための人形劇の実施に向け、ブルー族若者チームとともに準備を進め、これに関連して別の団体の劇を視察した。また、タイで行なわれた土地問題の会議への参加、他県での NTFP (非木材林産物) 栽培の視察、やはり他県での土地問題を学ぶスタディーツアーの実施など、他の NGO とのネットワークを生かした学びの活動も多く行なった。新たな魚の保護地区の設置のための準備も行なっている。(平野)



■多くの村人が参加しやすい場所で堆肥研修。

スーダン

■新規事業の準備を開始

06年以来実施してきた南部スーダンにおける車両整備を通じた難民帰還支援事業は3月をもって終了し、新規事業の準備作業を進めている。



■新規事業予定地であるチャッタ村の人々と。

活動予定地の南コルドファン州は南北スーダンの境界線上に位置し、内戦中には南北両勢力が入り乱れて激しい戦闘が行なわれた。そのため和平合意の中では「暫定地域」として南北共同統治が実施された。和平後は多数の国内避難民が帰還し復興が進められつつある一方で、南北の両政治勢力が拮抗している事情もあり住民間抗争が多く発生している。昨年からは民兵組織を含む南北両軍兵士の除隊と村への帰還、再定住プログラムが始まっている。JVCは同州の2つの地域で、村の社会インフラ再建支援を通じて、村人相互の信頼醸成と地域の安定化を目指した活動を開始する。6月には現地代表が州都カドグりに着任予定。

24年ぶりの複数政党制によるスーダン総選挙は、4月11～15日に投票が実施された。事前に多くの野党がボイコットする中、連邦政府大統領にはアル＝バシル、南部スーダン自治政府大統領にはサルバ・キールといずれも現職が選出される結果となった。投票用紙や有権者名簿の不備、投票所での恐喝行為、不透明な開票作業等、内外の選挙監視団体から様々な問題が指摘される一方、全体的には大きな騒動や武力衝突がなく選挙が終了したことを一定程度評価する声も聞かれる。(以上今井)

南アフリカ

■HIV/エイズ(リンボポ州)

農村でのHIV/エイズの治療に関する研修、栄養改善のための菜園づくり研修、患者や孤児へのケアを行っている。カプリコーン郡では、3月末にこれまで



■学校での菜園づくりに参加した生徒たち(リンボポ州ベンベ郡)。

研修に参加してきた在宅介護ボランティアと陽性者が中心となって、HIV/エイズおよび結核予防キャンペーンを実施した。各家庭を訪問して直接話をする中でHIV感染の可能性がある人が何名か発見され、ボランティアが状況をフォローしていく体制がつけられた。ベンベ郡では家庭菜園活動の一環として学校で先生や生徒を巻き込んだ研修を実施している。5月3～5日の三日間で地域内の二校において現地協働NGOのLMCCとともに研修を実施し、畝づくり、種まきなどを実施した。

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて、中学校の敷地を利用した地域住民対象の菜園研修を実施している。3月までの雨季・収穫期を終え、次期準備の段階を迎えている。5月中旬の研修では畝を作り直し、ほうれん草などを植えた。これまで種の採り方や苗作りを学んできたため、保存してあった種や苗を使うはずであったが、保存方法が悪く使えない種があることがわかった。苗はうまく作られており、次期栽培に使うことができている。(以上渡辺)

イラク

■地域社会再生のための活動支援

アラブ、クルド、トルコメン、アッシリアなどの多民族が住むキルクークで、対話により対立を防ぐ活動を行なっている地元NGOと協力し、「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップを2～3月の間、週2回、合計16回実施し、子どもたちの絵画作品共同製作の場を地域の平和づくりに活かす取り組みを始めた。好評につき、引き続きの実施を検討している。

■ガン・白血病医療支援

バスラ、バグダッドなどの病院への支援を継続中。

■政策提言

イラク戦争の検証を求めるネットワークの活動として、3月21日に「開戦から7年、検証シンポジウム」を開催。4月にも元国連査察団団長を迎えた院内集会やファルージャ出身者の証言集会を行ない、イラク戦争検証の必要性を訴えた。(以上原)

タイ

■日タイ若手農民交流

日・タイ若手活動家が今後、持続的な社会を創っていくことを目指した交流活動を行なっており、これに協力している。4月にはタイの若手農民による日本でのスタディツアー受入れに協力した。社会問題に取り組むNPOを訪問したり日本の新規就農者との交流を行なった。



■日本の新規就農者の農園を訪問したタイからの参加者。

■農村派遣研修

国際協力を志す日本人を対象にしたインターンシッププログラムで派遣されていたインターンの宮田が3月に帰国し、4月からタイ事業担当として着任した。(以上宮田)

■南タイでの在タイビルマ人医療支援

南タイの在タイビルマ人を対象に医療支援を行なっている。ゴミ焼却場で働く子連れの女性の子どものあやまって焼却炉に触れて火傷を負ってしまった。JVCは火傷の治療費の支援をした。この他、5名に医療支援を提供した。(下田)

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

ガザの幼稚園児約 320 名への栄養改善支援。西岸へブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布中。ハンユニスの栄養センターでは、栄養失調児に対し、栄養価の高いセモリナ粉や豆など家庭への持ち帰り用乾燥食材を配布しながら、栄養食の効果をより高められるよう、母親への教育やコンサルティングを強化している。



■栄養ビスケットを食べるガザの子どもたち。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療 NGO と協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育などの巡回診療活動を実施中。難民キャンプで子どもの栄養に関する保健教育を実施したところ、女性たちから好評だった。

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプ内のハンダラ文化センター女性グループの刺繍プロジェクトを支援。アーユス仏教国際ネットワークの協力で、ベツレヘムのオリーブ玉を使った平和念珠作りも継続。女性たちの計画による研修旅行を実施。ナブルスの難民キャンプの女性グループや地元の石けん工場などを見学し今後の活動へのアイデアを得た。

■平和創造・平和構築

東西エルサレムで、女性たちのエンパワーメントを目指したプロジェクトを実施中。東エルサレムではいくつかのグループに分かれ、女性たちが抱える問題について話し合うミーティングが行なわれている。(以上福田・津高)

アフガニスタン

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

4 月 1 日から診療所で患者の病気再発防止・予防のためのファミリーブック（家族単位のカ



■棚に並ぶファミリーブック。

ルテ）導入が開始された。当初、若干の混乱があったが、5 月には患者の流れもスムーズになった。村での病気予防についてはこれまでに 3 つ設置された保健委員会と月 1 回の連絡会議を行なってきたが、より具体的な実践につながるよう村の病気の傾向など必要な情報を交換していくことになった。また、3 年間の活動の振り返りに向け、村人や地域保健員、保健委員会のメンバーから聞き取りを行なった。

■教育支援活動

3 月 27 日から 6 日間にわたり、16 校 25 名の保健担当の教員を対象に健康教育研修を行なった。虫歯予防、栄養改善、結核やマラリヤ予防など 8 トピックについてワークショップ形式で行なわれた。参加者から、わざわざ街に出なくても村の近くで研修を受けられた、今まで知らなかったことに気づかせてもらえたなどの感謝の声がきかれた。

■政策提言

日本政府への提言活動の一環として JVC、難民を助ける会、ピースウィンズ・ジャパンが呼びかけ団体となり、アフガニスタンの市民社会支援を目的とする「日本アフガニスタン市民社会サポートファンド（仮称）」の検討会がスタート。日本政府と NGO が協力し、現地 NGO やコミュニティ組織を直接サポートすることがねらい。(以上谷山由)

日本国内

■現場と東京のスタッフが一同に集まった

4 月 17 ～ 18 日、埼玉県狭山市の智光山荘で各国事務所代表と東京事務所スタッフが集合し、組織全体の課題に関する議論を行なう会議を開催した。

最初に、既存の「中期目標（05 ～ 09 年度）」の振り返りと、これに伴って新しい「中期方針（10 ～ 14 年度）」を策定した。そしてこれを達成するための行動計画について話し合った。行動計画については地域開発／人道支援に分けて設定することとした。

また、前回（2 年前）の同会議で変更された各プロジェクトの新規提案や運営をサポートする体制についての振り返りを行ない、課題点などを共有した。その後、各国における JVC の活動の方針やその意義を記す「国別戦略」を「国別方針」と改め、記載内容の統一を図った。

普段は顔を合わせる機会の少ない国内外のスタッフが一同に会したことで、問題意識の共有や普段以上にコミュニケーションをとれる場としての役割も果たした。（細野）

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

『ともだち展』では、昨年から日本・朝鮮・韓国を巡ってひとつの作品を完成させる共同制作に取り組んでいる。今年のスタートとなる東京ワークショップが、在日本韓国 YMCA において開催された。共同制作のテーマは「行こうよ！カジャ、カジャ（行こう、行こうを意味する韓国語）！おまつりひろば」。絵本作家の浜田桂子さんとともに、韓国の協力団体オリニョッケドムの子供 6 名をはじめ、日本在住の子どもたち約 30 名が幅 1.3 メートル、長さ 5 メートルの紙におまつりひろばに向かう道を描きこんでいった。ワークショップ進行役には、小学生の頃から同行事に参加してきた高・大学生もボランティアとして協力。10 年間継続してきた行事の広がりを感じる会となった。（寺西）



■賑やかな色合いになった共同制作。

インターン紹介

今年の東京事務所インターンは九名。事務所やイベント先で見かけたらぜひ声をかけてください。

長畑 風 (アフリカ事業)

大学院の授業でNGOについて学び、とても考えさせられる楽しい授業だったのでそれから関心を持っていました。〇九年に大学院を中退して、これからどうしよう...と思ったときにJVCがインターンを募集しているのを見つけて思いきって応募しました。この一年は色々歩きまわり、見て聞いてさわって食べて...? たくさんものを吸収できるようにガンバリます!

山下 直子 (会員)

中学生の頃からアフリカに行きたいと思っていたのですが、一旦あきらめて、養護学校の教員を二十年勤めました。昨年仕事を辞め、若い頃の夢に立ち返ってアフリカボランティアチームに。他団体主催のケニアの小学校教室増設ワークキャンプにも参加し、アフリカの魅力とともに課題も見えてきました。今年は途上国への支援について学びを深めようと思っています。

国内ひろば

JVC network

小岩井 伸 (ホームページ)

ボランティアなどでタイへ四回とカンボジアを一回訪問。そこで「支援」という意味の奥深さに気がつきました。事務局長である清水さんの講義でJVCを知り、「一度しっかりNGOに関わりたい、今飛び込まなきゃ後悔する!」とインターンに。明るく個性豊かなスタッフがいる事務所では、毎回新しい発見があり、とても新鮮です! 多くの方と積極的に関わり、可能性を広げる一年にしたいです。

今野 香織 (アフガニスタン事業)

数あるNGOの中で、住民を主役として活動を行なっている点、様々な分野で活動を行なっ



■左から、長畑、山下、小岩井、今野、Winnie

ている点に魅力を感じてJVCに来ました。とてもオープンな組織である点に驚きましたが、その分学べることも多いと感じています。アフガニスタンという地を通して平和構築にNGOが携わっていく意味について考えたいと思います。

Winnie Tsang (イラク事業)

香港で生まれ高校からアメリカへ、一昨年の十月に来日しました。JVCを知ったきっかけは、友人の部屋にあったJVCカレンダーでした。初めて事務所に通った時、スタッフが常に走り回っているような印象を受け、公平・平和な世界を作ろうという情熱や魅力を感じました。私は特に国際保健政策に興味があり、ここで学んだ事を将来



■左から、太田、篠原、米田、石井

のキャリアに役立てることができればと思っています。

太田 華江 (広報)

高校で児童労働について知り、大学では国際協力に関わる分野について学んでいます。JVCとは、あるセミナーで出会いました。「伝える」「発信する」を大切に行っている姿勢に共感し、ぜひインターンとして活動してみたいという気持ちから応募しました。国際協力の現状を理解するとともに、大学院入試に向けて努力していきます。

篠原 利恵 (調査研究・政策提言)

音楽が好きで、世界各国の音楽を聴いているうちに、その土地のことや人間の営み、表情が気になるように。人を悲しませ

るのは権力やお金の問題だったり、でもそれだけでなかったり...とにかく目をそらさず、一度立ち向かって考えてみたいと思いました。将来は「良い!」と頭で思ったすてきな仕組みやあり方を、生活で表現できるようにしたいです。

米田 和希子 (調査研究・政策提言)

カナダで国際関係学を学び、協力隊でウガンダへ。長い海外生活を通し、日本での啓発活動や開発教育に興味が出て帰国しました。やりたいことがやっと見えてきたけど、どこから始めよう? そんななかで知ったJVCの理念や活動姿勢は「これこそ私がウガンダで学んだこと!」でした。留まるために立った場所ではなく、ここがスタート地点。その気持ちを常に持ち、何かにつなげていきたいです。

石井 久絵 (パレスチナ事業)

NGOやNPOに興味をもつてJVCのホームページを見つけた、ほとんど人生相談のような面接を経てここに来ます(笑)。人が暖かかったり熱すぎたりとても面白いし、知らなかったことに触れ、興味関心が広がることで楽しいです。今後はパレスチナやJVCとの関わりを通じて、自分や社会のあり方を考えていきたいと思っています。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

3 月計 2,099,189 円
4 月計 1,087,855 円

	3 月	4 月
無指定	107,804 円	470,864 円
タイ	50,000 円	0 円
カンボジア	262,425 円	13,475 円
ラオス	473,425 円	532,355 円
ベトナム	0 円	0 円
南アフリカ	51,305 円	3,750 円
パレスチナ	366,230 円	25,681 円
アフガニスタン	245,000 円	30,000 円
コリア	0 円	0 円
イラク	13,000 円	11,000 円
スーダン	530,000 円	750 円

※上表には「冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

3 月計 101,600 円 /23 件
4 月計 210,600 円 /15 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

3 月計 2,029,650 円 /1,702 件
4 月計 2,015,850 円 /1,714 件

編集後記

さてワールドカップ。これまでになく盛りあがってないわけだが、本号発行の頃にはどうなっているだろう (今は開幕前)。不評うずまく岡田監督だが、そもそも「オシム師匠直後の緊急登板」というとてつもなく厳しい仕事を引き受けたのだ。プレーするのは選手であり、監督だけ批判してもどうにもならない。にしても「もうちょっとどうにか…」と思わずにはいられないが。(H)

新スタッフ紹介

高杉 香織
たかすぎ かおり

JVC コンサート事務局



アフリカで国際協力がしたいと興味を持ち始めてから十年以上が経ち、気持ちだけは大きいものの何もできていない：そんな私が見つけたのが JVC コンサート事務局スタッフの募集でした。しばらく前から、日本にいても国際協力としてできることはたくさんある、その一つが日本に住むより多くの人たちに海外のことを知ってもらうことだと考えていました。そして「音楽を通して国際協力を」を掲げたこの活動は、私にぴったりだと感じたのです。

クラシック音楽には疎い私ですが、毎週の合唱練習を楽しみにしています。これから十二月のコンサートに向けて一日も早く仕事を覚え、明るく元気な事務局スタッフとして働けるようにがんばりたいと思います。いつか「世界、平和になりました」コンサートができることを目指したいです。

JVC 代表理事の谷山と前代表理事の熊岡が、岡田外務大臣の公式アドバイザーに就任しました。

JVC 代表理事の谷山博史および前代表理事の熊岡路矢が、今年五月に岡田克也外務大臣のもとに設置された「日本の国際協力のあり方に関する NGO アドバイザリー・グループ」の常任メンバーとなりました。

このグループは、「日本の国際協力のあり方について実際の支援の現場からの意見・提言を聴取する場(外務省)」として設置されたものです。JVC としては、現在政府内で見直しが進められている ODA の改革をより実質的なものにする上で、外務大臣に直接助言できることに意義を見て今回のアドバイザー招へいを受けることを決定しました。

「NGO アドバイザリー・グループ」
常任メンバー

外務省側・

岡田外務大臣、福山副大臣、西村

大臣政務官 他

NGO 側・

長有紀枝 (ジャパン・プラットフォーム

ム共同代表理事)、大西健丞 (ピース

ウィンズ・ジャパン代表理事)、片山信

彦 (ワールド・ビジョン・ジャパン常

務理事・事務局長)、熊岡路矢 (東京

大学大学院 客員教授、谷山博史 (J

V C 代表理事)、大橋正明 (国際協力 N

GO センター理事長)

JVC ウェブサイト 会員専用ページパスワード (2010 年 7 月～8 月) :

U4gTR9preW

JVC ウェブサイトの会員専用ページでは、T&E のバックナンバーを順次公開中です。

ノブ・ティムさんを偲ぶ

ありがとう、さようなら、 ノブ・ティムさん

カンボジア事務所現地代表 山崎 勝

6月9日の早朝、出張先にいた私の携帯電話に連絡が入りました。JVC 技術学校で長年活躍してきたノブ・ティムさんが亡くなられたとの知らせでした。享年 59 歳でした。

ノブ・ティムさんは、ロン・ノル時代の 1972 年に国費留学生として横浜国立大学工学部で学び、ポル・ポト政権下の 1978 年に帰国するも強制労働に従事させられました。その後、ベトナム軍の侵攻の際に集団農場を抜け出し、日本へ逃れようとタイの国境に近い山を半年間さまよったあげくベトナム軍に捕まり、日本語の本などを持っていたことから、中国人のスパイと疑われて 1 年半も投獄されました。

その後釈放され、タケオ県の工業局で働いていた 1986 年に、井戸掘りの技術者としてタケオ県に派遣されていた簗田さんに「日本の方ですか?」と声をかけたのが、JVC と出会うきっかけだったそうです。それから 20 年以上に渡り、2 年前に亡くなられた馬清さんをはじめ、多くの日本人、カンボジア人と共に JVC 技術学校を支えてきました。

しかし、これまで苦勞が重なったこともあってか、このところは体調があまり良くありませんでした。以前から肝臓を患い、治療が続けていたのですが、亡くなる 2 週間ほど前、「咳が出て、吐血したので病院へ行ったら結核だと言われた」と、ご自分で病状を報告に来てくれたのが最後でした。「私の病気はなかなか



■今年 4 月に、JVC がカンボジアで最初期に掘ったタケオ県の井戸を訪問されていた。

良くならないですね」と、どんなに辛くても弱音を吐かないノブ・ティムさんが悔しそうに肩を落としていました。

JVC 技術学校は 2008 年にプノンペン市郊外に移転し、任意の職業訓練学校から、政府の認可を得た技術専門学校として新たなスタートを切ったところで、ノブ・ティムさんも新しい教材作りに励んでいる最中でした。また、日本の工業高校や工業大学との交流の準備を進めていたところで、ノブ・ティムさんも楽しみにしていただけに、本当に残念です。

しかし、彼のことを思えば、今はゆっくりとさせてあげたい気持ちで一杯です。病気で体力的にも精神的にも厳しい中で、その期待と責任を一身に背負ってきた彼の苦勞は大変なものであったと思います。そして、ノブ・ティムさんがこの世を去っても、彼がこれまでに築きあげてきたものはずっと残っていくと思います。彼が 20 年前に日本語からカンボジア語に訳した整備士の教本は、現在でもカンボジア全土の職業訓練学校で使われています。その功績は、今後も輝きを失うことはないでしょう。

ご冥福をお祈りいたします。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000 円
- ◎学生会員 5,000 円
- ◎団体会員 30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

■オリエンテーション (説明会) にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第 1 月曜日午後 7:00 - 8:30
- ◎第 2・第 4 土曜日午後 2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙 90%、間伐材パルプ 10%) で作成しました。

※本誌は、イーパーツ寄贈プログラム「Adobe ソフトで市民活動も、クリエイティブ力&デザイン力 UP!」提供の Adobe Creative Suite 3 Design Premium で作成いたしました。



会員数 (6 月 4 日現在) 合計 1,242 名
(正会員 601 名、賛助会員 641 名)